

「迷宮 (Labyrinth)」 図像群に関する一考察

—迷宮史概略, および現代アメリカにおける迷宮図像活用について—

中島 和歌子

1. はじめに

迷宮, という語を目にした時, あるいは耳にした時に, 果たしてどのようなものが喚起されようか。通常, 複雑に入り組んでいて, 解くのに一筋縄ではいかないようなどこか謎めいた物事の比喩として, 迷宮という語が使用されることが多いように思われる。あるいは, 我々は容易に, 迷宮入りという語を連想するだろう。

さて, 迷宮とよく似た日本語として迷路が挙げられるが, 日常生活においては, これら両者が厳密な区別の元に使われているという印象は薄い⁽¹⁾。しかし, それぞれの語が有しているかたちへと視線を向けるとき, 途端に両者は, それが互いに, 明らかに別ものであることを主張するのである。

迷路の形状については, 改めて説明するまでもないだろう。入り口から迷路の内部に進入して, 多数の分岐路や袋小路に直面してその都度迷いながらも正しい道を選択してゆくことで, やがて出口に到達し, 外部への帰還が果たされるのだ。一方, 迷宮には, 入り口=出口である唯一の開口部しか存在せず, 内部の通路は完全に一本道である。そのため迷路とは異なり, 迷宮の内部へ足を踏み入れる者は, 一見したところ, 複数の選択肢から正しい通路を選び取るために迷う必要はないように思われる。だが, だとするならば, いったい誰が, そして何が「迷」うのだろうか。

上述したように, 迷宮 (Labyrinth) は迷路 (maze) と全く異なる形状を有する。本稿では, 迷宮図像群を人々がどのように受容し, 活用してきたのか, キリスト教との関連に着目しながらその歴史の道程を確認する。そののち, 特にシャトル型 [fig.1] と呼ばれるタイプの迷宮が, 1990年代以降にアメリカを中心に普及を遂げている現象「ラビリンス・ムーブメント」⁽²⁾について紹介, 宗教学的な分析を行うとともに, 迷宮と人との関係が織りなす様相についても考察を加えたい。

2. 迷宮という図像とその研究について

次節では迷宮の図像史を提示するが, その前提としてまず, 迷宮という図像の定義と分類について, ヘルムート・ヤスコルスキーが整理したものに従って詳細に確認しておく。

第I型 本来の意味での迷宮, 古典的迷宮

外部への開口部をもつ円形または矩形の線の幾何学的図形。その線は, その間を通る通路を設定するための境壁と理解できる。ヘルマン・ケルンは, こうした「一本道の迷宮」の通路の諸特徴を列挙している。

1, 十字路がない, すなわち, 通路を選択する余地がない。

- 2, つねに振り子のように180度, 向きを転ずる。
- 3, 最大限に迂回して迷宮の内部空間を満たしている。
- 4, 目標の中心の傍らを繰り返し通過する。
- 5, 必然的に中心に到る。
- 6, 中心から, ふたたび唯一の出口への通路として外部に通じる。

古典的迷宮の, 確実な年代の最古の迷宮図は, 紀元前13世紀に遡る。〔ペロポネソス半島の〕ピュロス出土のネストルの宮殿の粘土版の裏面⁽³⁾。

古典的迷宮は, 通路の迂回回数と迂回方法によって, さらにいくつかに分類されるが, 最も重要なものは次の2種である。

- 1, クレタ型 [fig.2]: 7重の迂回路をもつ。
- 2, シャルトル型: 十字形を表す11重の通路を持つ。中世の教会の迷宮の典型。⁽⁴⁾

上記の通り, 迷宮図像の歴史は非常に古くまで遡ることが可能である。なお, 詳細は次節に譲るが, その分布地域に関して言及しておく, 古代において迷宮は主に地中海沿岸部, そして中世, 近世においてはフランス, イギリスを中心とした西欧, またスカンジナビア半島などで利用されていたことが知られている⁽⁵⁾。

次に, 図像がどのように解釈されるのか, いかなる意味を持つのかという問題が挙げられよう。歴史的に知られている迷宮図像群のカタログ化など, 多大な業績をあげているヘルマン・ケルンによると「最も興味深く, 最も困難なのが, 迷宮はいかなる意味と関係し得るのかといった問いであり, 参照できる資料は極端に不十分なものである」という状態であり, そのシンボリズムについては諸説あるものの, ケルンによると概ね「通過儀礼, 死と再生, 靈魂の生まれ変わり, 母なる大地の子宮, 惑星や太陽の動きなど」にまとめられるほか, 様々な文脈のもとで, 防衛機能, 魔除け, 異界への扉, 巡礼, 中心, 聖域といった多様な象徴性を見出すことができるという⁽⁶⁾。

なお, 迷宮に関する先行研究について付言すると, 西欧を中心に, 世界各地に存在している迷宮図像を網羅的に収集したケルンが, 1981年にミラノで企画した展覧会のカタログを遺しているが, この大著⁽⁷⁾が迷宮研究におけるひとつの集大成といってよい。ただ, 本邦において迷宮に焦点をあてた研究はそれほど盛んではなく, 迷宮図像自体もあまり認知されていないのが現状であり, 西欧の研究を翻訳した書物の他は, 僅かに和泉雅人『迷宮学入門』が確認できるのみである。

なお, 和泉は「迷宮はオカルトブームや古代ブームなどに力を得て, 現代人の関心を集めはじめている。(中略)そこには茫漠とした価値の多様性のなかに生きる現代人たちが, 強烈に中心を志向する迷宮のような存在に惹かれていた現象がみてとれるのかもしれない。とはいっても, その受容が精神的なレベルでおこなわれているとはいいいがたい。(中略)受容されているのは迷宮ではなく, むしろ迷路のほうであるといえるだろう」⁽⁸⁾と述べているものの, 前節で述べた通り, 必ずしもこの記述は現状に当てはまるものではない。詳しくは後述するが「ラビリンス・ムーブメント」においては, 人々は迷宮図像の通路を自らの足で歩き, または指で辿りながら⁽⁹⁾祈り, あるいは瞑想を行っており, この現象は所謂スピリチュアリティに含まれるものとみなすことができるためだ。本論の趣旨は, 現代における迷宮の受容例, 展開事例を示すことにあるが, それを通じ, 本邦におけるこれまでの迷宮研究を批判的に継承することをも目指したい。

3. 迷宮図像史 ——古代から近世にかけての迷宮史概略——

3-1 古代 ——神話、舞踏、都市——

迷宮という語について語られるときにははや必須の事項が、古代ギリシャ神話の一連のエピソード⁽¹⁰⁾との関連であろう。しかしながら、クノッソス宮殿こそが迷宮であるとし、labyrinthという語の起源をクノッソス宮殿に求めたアーサー・エヴァンズの説(両刃の斧labrys→両刃の斧の館：クノッソス宮殿Labyrinthios→迷宮labyrinth)は、今日では学術的な地位を殆ど失っている⁽¹¹⁾。なお、クレタ島では、2世紀～5世紀頃のものと思われる貨幣の裏面にクレタ型迷宮図像があしらわれている例が確認できるものの、何らかの建築物、建造物としての迷宮は確認できていない状況である。なお、古代ギリシャ・ローマの文献⁽¹²⁾は、クレタのものほかに、labyrinthosと称されたものの存在を伝えているが、当時のlabyrinthosが示すところのものは厳密な意味での迷宮ではなく、巨大な、驚嘆に値する石像建造物をさしていたという通例を和泉が指摘しているほか、紀元1世紀頃から、迷宮という語に迷路概念を対応させる習慣が広まったとされる⁽¹³⁾。すなわち、迷宮という語が示していたもの、ならびに迷宮という概念は、今日まで伝わっているクレタ型迷宮図像と完全に対応していたわけではないのであり、また、ダイダロスの造った迷宮とは何であったのかという問いに対して答えるためには、決定的根拠が失われている状況であることを確認しておく。

なお、従来、先述したアリアドネとテセウスの物語と迷宮との関連が広く指摘されており、今日の我々が抱く迷宮イメージの構築に多大な影響を果たしていると考えられるものの、「アテネの思想に潤色されたクレタの迷宮物語は、ミノタウロスの死と王女アリアドネの誘拐によって終わるわけではない」⁽¹⁴⁾。そして、この物語においては、渦巻螺旋状の構造⁽¹⁵⁾が重要な位置を占めていることが併せて指摘できよう。渦状のかたちの出現がこの物語において確認できるのは、ミノタウロスが閉じ込められていたとされる迷宮、ならびに、それを設計作成したダイダロスの「かたつむり」である。

ダイダロスはシシリのカミーコスに無事に着いた。ミーノースはダイダロスを追ひ、探索しつつあらゆる地に巻き貝を持ち来り、その貝に糸を通した者に多くの褒美を与えると約束した。この方法によってダイダロスを見つけることができたのである。シシリのカミーコスへ、ダイダロスの隠れているコーカロスの所に来て、その貝を示した。コーカロスはこれを受取って、糸を通す約束をし、ダイダロスに渡した。彼は蟻に糸を結びつけ、貝に孔をあけて蟻にその中を通らせた。ミーノースは貝に糸が通されているのを見て、彼のところにダイダロスのいることを知り、直ちに彼の引渡しを要求した。⁽¹⁶⁾

カール・ケレーニィは神話中に出現するふたつの渦巻螺旋状の構造を取り挙げて、「迷宮と蝸牛の殻とは同一観念の二つの表現方法であることがわかる。すなわち、一方——蝸牛の殻——は自然から直接に提供されたものであり、もうひとつの方——舞踏化された迷宮も、絵に描かれた迷宮も、建築物として構想された迷宮も——は人間の手で創造されたものである。両者において

ひとしく、世界は存在の同一の局面、すなわちそのいかなる死をもかいくぐって無限にうねうねと転捻していく能力を開示する」⁽¹⁷⁾と述べており、螺旋状構造とは生命の継続、無限性、生一死一生の象徴であるという見解を示している。

ここで注目すべきと思われるのは、ダイダロスと関係のある迷宮と蝸牛の殻のいずれにせよ、そこを通過する鍵が糸であるとされていることである。迷宮と蝸牛の殻は、それ自体が渦的で螺旋状の構造をしているが、その内部を通過するものとしての糸によって、さらにその形状が強調されているといえよう。また、中世以降、実際に人が内部の通路を歩くことが可能なタイプの迷宮図像群が出現してくることになる（次節参照）が、糸はその先駆的な意義を持つとも考えられる。

また、糸というものについて、以下では舞踏との関連性も紹介しておきたい。テセウスが迷宮から帰還を果たすくだりは通過儀礼として従来語られている⁽¹⁸⁾が、ケレーニは「舞踏化された迷宮」と述べている通り、迷宮を、建造物であるというよりは特定の舞踏の形状であるとみなしている。ケレーニはホメロスの『イーリアス』の記述などを参照しつつ、綱を使って踊る輪舞の列が迷宮状に方向転換しつつ中心を目指し（死への道）、中心から逆行して戻っていく（再生の道）という鶴舞踏（geranos）⁽¹⁹⁾を迷宮図像の模倣であるとしたうえで「踊り手たちはいわばアリアドネーの糸を手に行っているのだ」⁽²⁰⁾と述べている。

さて、建造物としての迷宮の存在が確認されていないという状況下であるため、古代の迷宮理解は、より観念的なものとしてとらえられる傾向にある。ヤン・ピーパーは「迷宮神話の歴史的基礎は、迷宮的にしつらえられた単一の巨大な建造物ではなく、（中略）探し求められてきた迷宮という巨大建造物は、都市クノーソス自体、すなわち、野蛮世界と境を接する古代の島の大都市にほかならなかったのである」⁽²¹⁾として、迷宮とは都市の隠喩であるという説⁽²²⁾を提唱してきた。

ピーパーの説と関連して、古代ローマ（紀元前2～紀元5世紀頃）の影響下に置かれた地域にみられる（ギリシャにはみられない）迷宮図像群について言及しておきたい。この時代には、民家の床にタイルで描かれた迷宮〔fig.5〕が普及した。その多くは長方形であり、中心にミノタウロスやテセウス、アリアドネが描かれている場合が多々見受けられるほか、全体は大まかに四分割され、迷宮の周囲には城壁と見られる紋様が描かれているのが特徴といえる。なお、床に描かれているものの、これらは「実際に歩くには狭すぎるため、装飾的あるいは瞑想的目的にもっぱら使用されていた」⁽²³⁾とされる。また「現実世界であれ精神的世界であれ、望まれない来訪者を混乱させる防御としての仕掛けとみなされていた」⁽²⁴⁾と解釈されている。

これらのモザイク迷宮図像群において重要なのは、城壁を備えていたという特徴から、迷宮を都市あるいは世界とみなしていたと考えられる点にある。和泉はロムルスによるローマ創建と、境界線による都市空間の聖化の関連を指摘しており、プルタルコス『英雄伝』の記述も引き合いに出しつつ、ローマという都市の創建儀礼の過程における迷宮状構造が、モザイク迷宮の図像に対応していることを示している⁽²⁵⁾。

このローマのモザイクにおいて迷宮は、ひとつの民間伝承から、芸術的デザインとしての図像的地位を確立したことになるが、さらに大きな転換点となるのが、キリスト教による迷宮図像群の受容となる。これにより、狭い通路しか備えていなかった迷宮は、ようやく人が通行できる通路を得ることになるのである。

3-2 中世 ——キリスト教による迷宮受容、シャルトル型の出現——

通常、迷宮がキリスト教によって受容された最古の事例として取り上げられるのが、紀元324年のものと推定される、ローマ支配下のアルジェリア、エル・アスナムにあるバジリカの床に描かれたもの [fig.6] である。これまでに確認してきた事例と決定的に異なる特徴が、迷宮の中心部には、従来みられるミノタウロスらの絵のかわりに、Sancta Ecclesiaと読み取れるアルファベットが置かれているという点 [fig.7] である。一本道の行き着く先に「聖なる教会」を置くことは、信徒たちにとっては信仰の試練という意味合いがあったとジェフ・セイワドは指摘しており、中心部の周囲を同心円状に通路が取り囲んでいるという構造は、プラトンやピタゴラスらに基づく中世の宇宙観（地動説）に対応しているという。セイワドは、こうした迷宮の宇宙論的性質が、中世の写本にみられる迷宮図像群の膨大な事例（おおむね9世紀～10世紀にかけての期間に多く生じた）に影響を与えたことを示唆している⁽²⁶⁾。

他に注目すべきなのは、クレタ型の迷宮図が備えている7週の通路（seven circuit）の象徴的意味について、キリスト教的解釈が生じたという事例であろう。ヨーロッパ最古（806-822頃？）の写本迷宮は、ドイツのカールスルーエにあるもので、「都市エリコUrbem Jericho」と図の傍らに書かれていることから、旧約聖書のヨシュア記の記述⁽²⁷⁾が、異教的起源をもつクレタ型の迷宮図と対応するものとして扱われていたことが見て取れるだろう。和泉はこれを迷宮図像群のキリスト教化の過渡期にあたる事象と位置づけるとともに「エリコの町の城壁が迷宮図によって表現されるのは、エリコが堅固な防禦体制をもっていたことを、迷宮図のもつ魔術的守護能力をイメージ的に重ねることによって象徴的に示すものであり、翻って、そのような強固な町を攻略することのできたヨシュア軍の偉大さを伝えるため」⁽²⁸⁾との見解を示している。

なお、中世キリスト教世界においては、7週のクレタ型迷宮図は徐々に減少し（エリコの迷宮の事例は19世紀まで確認することができる）9世紀には、基本的な形はクレタ型に基づいているものの、周回路が11周となった「オトフリート型」とよばれるタイプが出現した。キリスト教の数のシンボリズムにおいて7は完全なる数であるが、それが11⁽²⁹⁾に変更されたことは、異教の伝統を吸収する過程において、図像の制作者たちが意図的に、罪に汚れた現世の象徴としてのキリスト教的意味を迷宮に与えたことを意味する。前節において言及したローマのモザイクにおいては、迷宮図像は守護された聖なる都市、世界とみなされていたことを確認したが、そうした意味での聖性はこの時期、失われていったことになる。

また、ギリシャ神話におけるテセウスとミノタウロスの関係には、キリスト教とパラレルな要素があることにも着目しておきたい。すなわち、キリストが悪魔の誘惑を退けることが想定されているのである⁽³⁰⁾。オトフリート型の後に普及したシャルトル型の事例を通してみていくことにするが、まず、この類型はその名前の通り、フランスのシャルトル大聖堂に13世紀に作られた迷宮を代表例としている。この迷宮は、大聖堂の身廊部分、西の入り口から内部に入っすぐの床に描かれており、直径は13mほどで、人間が通路（幅34cm）を実際に歩くことができるという最大の特徴を備えている。同時代には、フランス北部を中心にイタリア北部、中部などにおいても、多くの大聖堂や教会の床に迷宮が設置されたものの、その多くが失われた⁽³¹⁾ため、良好な状態で現

存しているシャルトルのものが最も良く知られているほか、現代において重要な意義を有している。

こうしたシャルトル型教会迷宮の一本道は、選択枝や分岐を前提としない救済の思想であり、信者たちは「罪の世界」⁽³²⁾たる迷宮図があしらわれた床を歩くことによって「霊的な死と再生の疑似体験」⁽³³⁾を得ることができたと考えられている。また、中心部に到達した信者たちは「アリアドネの糸」たるキリストの導きによってもときた路を戻り、帰還の難しさを特性とする「死の国」⁽³⁴⁾である迷宮から脱出することになる。

ヤスコルスキーは、「この道を行く者は、すでに変身を遂げた者、新しい形式の実存、新しい存在様式を発見した者である」⁽³⁵⁾と述べているが、古代から中世にかけて、迷宮の聖性のありかは都市や世界といった隠喩などの内にはなく、キリスト教の信徒各人の内にその場所を移し、その過程で、より個人的、精神的な性質に変容したといえることができるだろう。それは、図像そのものが表すとされる聖性や、図像の解釈が孕む聖性とはいささか趣が異なり、図像の中を人間が実際に歩むことによって完成される実践的聖性と呼ぶことができると思われる。なお、ローマ時代には家屋の装飾などにモザイク迷宮があしらわれていたことを既に述べたが、中世の教会迷宮はそれとは逆に、いわば宗教的パブリックな場所に置かれていることも指摘しておきたい。そのため、中世においては、教会の床に可視的に描かれたパブリックな迷宮図像の通路と、その通路を歩む者それぞれの不可視でプライベートな精神性の歩みが、緻密に重なり合っていたと推測されるのではないだろうか。

3-3 近世・近代 ——「世俗化」してゆく迷宮、迷路の興隆——

さて、北フランスにシャルトル型の迷宮が普及していた頃、スウェーデン、フィンランドを中心としたスカンジナビアでは、屋外につくられた置石による迷宮（通常「トロイア城」と呼ばれる）⁽³⁶⁾が広まっていた。こちらでは、古代のクレタ型形状が保持されている点で、キリスト教化された同時代のシャルトル型とは異なっているほか、「異教的習慣と関係があり、迷宮は祖先の霊の住処であると考えられていた」⁽³⁷⁾などの解釈がなされている。また、中世イギリスにおいては、教会内部ではなく屋外に作られた芝迷宮（Turf Labyrinth）とよばれるタイプのものが存在していた。芝迷宮は主として教会や修道院など宗教的施設の脇に作られ、その形態分布にはクレタ型とキリスト教化された型との混在がみられる。なお、置石迷宮、教会迷宮、芝迷宮はそれぞれの地域で限定的にみられたものであり、共存はしていないことにも留意したい。

芝迷宮は教会迷宮の影響のもとに成立し、同様の目的で使用されていたと考えられているものの「13世紀以降、（中略）時代の流れとともに民衆の祭りなどに利用されるようになっていく。世俗化とともに芝迷宮の形式や機能もその宗教的厳密さを失っていく」⁽³⁸⁾とされている。このことから、教会迷宮が宗教的パブリックであったのとは異なり、教会外に設置された芝迷宮は、より世俗的パブリックなものとしてみなすことができよう。

迷宮という人工物のマテリアルとして芝、すなわち自然の植物を使用することは、ケレーニイがダイダロスの螺旋について述べていた、同一観念の二つの融合という局面が達成される契機であったとも考えられようが、植物という素材は以降、和泉をはじめ迷宮研究者たちが今日までの

迷宮の世俗化例ととらえる現象に大きく関わっていくことになる。15世紀、分岐路を備えた迷宮、即ち迷路が図像としてはじめて登場したのを境に、一本道で迷うことなく必ず中心に至るという迷宮に取って代わるように、途中で選択肢をもつ迷路が徐々にその勢力を増していくこととなった。その代表的な例が、16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパの宮殿がそなえていた、庭園迷宮、生垣迷路 (Hedge Maze) とよばれるものである。これらが「これまでのすべての迷宮形象と異なる点は、屈折しながらもはっきりと中心を目指して引かれる線が、この庭園迷宮においては迷路システムのために放棄されたことである。(中略) この庭園迷宮はもはや宇宙論的な思弁を象徴化すべきものではなく、たんに気晴らしのために使用されたものである」⁽³⁹⁾。今日我々が多く目にする、アトラクションとして楽しむことのできる三次元の、壁を備えた迷路の萌芽をここに見ることができる。なお、初期には迷宮状の生垣も存在していたが、時代が下るにつれてそれらは迷路状のものに駆逐されていくことになり、研究者たちはこの現象を、象徴性の喪失、通俗化の過程とみなし、ピーパーはこれをもって「古典的迷宮形象の終焉」⁽⁴⁰⁾とする見解を表明しているのである⁽⁴¹⁾。

4. ラビリンス・ムーブメントに至るまで

ここまで、迷宮図像に関連する先行諸研究に基づき、古代から近代にかけて、迷宮がいかなる変遷を辿ってきたのかを確認してきた。その際、舞踏との関連や、実際に人間が通路を歩けるタイプの迷宮図像の紹介など、主に人間の身体的動きと迷宮図像群の関連に留意しつつ迷宮図像史を概観してきたが、以降では20世紀以降、即ち現代における迷宮と人間の関係について、ラビリンス・ムーブメントを主軸として論じる。

和泉は「中世から時代が下るにつれて、迷宮表象は次第に原初の魔術的・宗教的な力を失ってきたのだが、迷宮を素材とする遊戯が多数出現することによって世俗化と矮小化の過程が加速度的に進み、19世紀においてその過程が完遂された感がある」⁽⁴²⁾と述べている。「中心の喪失」ならびに「全体性の喪失」⁽⁴³⁾という言葉で和泉が表しているのは、人間が宗教的中心の求心力を失ってきた過程で、迷宮図像群からも中心が失われ、分岐路があらわれ、迷路がそれにとってかわったということであり、端的に言うならば、近代化、世俗化と言い換えることが可能であると推測される。だがそれは、キリスト教化された迷宮を支えていたキリスト教的教義や世界観といった力の、近代における弱体化に基づいた論にとどまり、今日のラビリンス・ムーブメントまでは射程に入っていない。そのため、本稿においては、シャルトル型を中心とした迷宮図像が現代において見せた普及の展開をキリスト教との関係に注目して辿ることで、和泉の迷宮論を引き継ぎたい。併せて、宗教学的には、スピリチュアリティにおけるキリスト教的要素を分析するための一事例を示し、分析を行いたい。

それに先立ち、以下では、ジェフ・セイワドの議論を参照しながら、ラビリンス・ムーブメントに到るまでの、20世紀における迷宮図像群の展開を確認し、どのような素地のもとで迷宮の流行が起きたのかを探る⁽⁴⁴⁾。

20世紀末の、迷宮リヴァイヴアルとでも呼ぶべき現象の先駆けとなったのは、セイワドによると、1970年代前後のアーティストたちが生垣迷路や芝迷宮に注目した現象であるという。親指の

指紋状の生垣迷路⁽⁴⁵⁾が1969年に、イギリス人彫刻家ミッチェル・エアトンによってつくられたことをきっかけとして、手、足、身体などを象徴的に表した迷路が流行した。今日でもそうした潮流は増大しており、ヨーロッパやアメリカなどにおいてはmaze designerという職種が存在し、空中からでないと迷路の描く図像を認識できないような凝ったデザインの生垣迷路が出現している。

その後、個人の庭園に生垣や芝による迷路、迷宮が設営される例が増加し、その際、オーナーのリクエストに応じた装飾的要素を迷路や迷宮の形状に盛り込むといったことが行われていた。近年の例においては、オーナーの複雑な人生あるいはスピリチュアルな信念・哲学といったものの反映として、伝統的な迷宮図像、とくにスカンディナヴィアの置石迷宮やイギリスの芝迷宮の形態が頻繁に選択されているとの分析がセイワードによって行われているほか、芸術家が自らの人生を旅になぞらえて制作した芝迷宮の例〔fig.8〕などが報告されている。これらの事例は一見、近世イギリスにみられる世俗化していく芝迷宮と類似しているようにも思われるが、迷宮設置の目的に見受けられる霊的要素はより濃く、オーナーやアーティストの霊性に多くを依っていることが特徴であるといえるだろう。

1981年には、ケルンの企画した迷宮に関する展覧会がミラノで開かれたほか、現代美術や文学などの場でも迷宮という語に注目が集まり、ヤスコルスキーはこれらの現象を称して「80年代の迷宮的なものの多様な噴出」⁽⁴⁶⁾と語っているが、この時期は、やがて来るべき迷宮図像の現代における急速な普及、およびラビリンス・ムーブメントの基盤となる時代であったと考えられる。

5. ラビリンス・ムーブメントとローラン・アートレス

ラビリンス・ムーブメントは、1991年12月30日、アメリカ、サンフランシスコのグレイス・カテドラルにおいて、司教座聖堂参事（現在は名誉参事）である心理療法士ローラン・アートレス（1945-）が主導し、聖堂内部の床に、シャルトル型迷宮のレプリカを原寸大にあしらったカーペット〔fig.9〕が設置されたことに端を発する。アートレスによれば、新聞広告を目にした多くの人々がグレイス・カテドラルを訪れて迷宮にふれ、迷宮の通路を歩く体験をするために行列をなして順番を待ったという⁽⁴⁷⁾。翌年以降も、この迷宮の複製（周回路を簡略化したタイプのものも含め、シャルトル型の複製はシャルトル・レプリカと呼ばれている）が多くの注目を集め続けたことがきっかけとなって、迷宮という図像が広く知られるようになり、1990年代以降のアメリカでは、教会や公園などの場所に急速に広まっていった⁽⁴⁸⁾。なお、アートレスは1995年にヴェリディタス（Veriditas）⁽⁴⁹⁾という名称のNPOを設立し、迷宮を活用する人々のためのファシリテーターの養成（1997年～）や、シャルトルを訪れて迷宮を歩くツアーの主催などの活動を今日まで継続して精力的に行っている。

以上がラビリンス・ムーブメントの始まりの概要であり、90年代以降、迷宮に関する多くの書籍が発行され、迷宮はヒーリング、瞑想、祈りのツールとして多角的に活用されている状況である。

さて、アートレスとその著作『聖なる道を歩く*Walking the Sacred Path*』は、今日発行される迷宮関連書籍⁽⁵⁰⁾の殆どに影響を与え、言及される立場にあるため、その迷宮観や迷宮理解、迷宮の紹

介時にいかなる特徴が見受けられるかを確認することは、今日のラビリンス・ムーブメントを知るために極めて重要であると考えられる。そのため、ここではアートレスの思想について、その著作などを手がかりとして確認していきたい。アートレス自身は、神学の教育を受けた監督教会の聖職者であるというバックグラウンドを持っており、迷宮を聖杯のひとつの形態として理解する⁽⁵¹⁾など、その迷宮観にはキリスト教的な要素との関連も深い。注目すべき点は、あまたの型が存在している迷宮図像のうち、アートレスはシャルトル型を極めて重視しており、クレタ型やローマ時代のものなどについてさほど詳細な言及をしない傾向にあることだろう。クレタ型の迷宮のほうがシャルトル型よりも容易に描くことが可能であり、近年発行された多くの迷宮関連書籍がクレタ型の描き方を図解している [fig.3] にも関わらず、アートレスの著書及びヴェリディタスのウェブサイトでは、これについての言及は見受けられない。

本稿で確認してきたように、迷宮図像はその起源において、キリスト教の視点からみた場合に異教的な性質を有しているものの、中世にキリスト教化されたといえる。シャルトル大聖堂に作られた迷宮は、キリスト教化された迷宮の最たるものともいえることから、キリスト者としてのアートレスがクレタ島などよりもシャルトルのほうを「ラビリンス・ムーブメントの霊的な発祥地 (spiritual home)」⁽⁵²⁾とみなすことは自然なことのように思われる。加えて、自身が1991年にシャルトルを訪れた経験がアートレスの活動の原点となったことを鑑みるならば、ヴェリディタスがプログラムの一環として、シャルトル大聖堂に今なお遺る迷宮に「巡礼」⁽⁵³⁾する企画を立てるのも理解できるだろう。

以上のように、アートレスの出発点は、極めてキリスト教的な文脈を意識したスピリチュアリティにあり、ラビリンス・ムーブメントにおけるシャルトル・レプリカの普及は、こうしたアートレスの思想的、宗教的な基盤によるものだといっていよいだろう。しかしながらアートレスは、ラビリンスが人々に受容されるにつれて、こうしたキリスト教的要素を薄めてきている。最大の変更点は、迷宮を歩く瞑想について、その際に人々が経験するであろう内的なプロセスについて語る際に、初期のアートレスはアヴィラのテレサによる「神への道」の説明に依り、浄化 (purgation)、照明 (illumination)、合一 (union) の3ステージに対応させる解説を行っていたものの、こうした説明方法に加え、3つのR (The Three Rs) というよりシンプルな解釈を提案していることである。3つのRとは、解放すること (releasing)、受け取ること (receiving)、帰ること (returning) の頭文字を取った呼称であり、キリスト教的な要素が前面に押し出されず、より多くの人々に理解しやすく、受け入れられやすい方法に改められていることがわかる。

アートレスは『聖なる道を歩く』改訂版 (2006) の序文において「大学のキャンパスであったり、病院のスタッフと共にいるときなど、世俗の環境においては、私は ‘3つのR’ を使います」と述べているほか、二作目の著書『聖なる道程の道連れ *The Sacred Path Companion*』においても、この3つのRについて言及されている⁽⁵⁴⁾。また、グレイス・カテドラルのウェブサイトにある、迷宮についてのページには、purgation (releasing)、illumination (receiving)、union (returning) という表記で、迷宮を利用するためのガイドラインが示されており、キリスト教的思想基盤を持つ人、キリスト教的な要素とは離れている人の両方に訴求するように、柔軟な紹介がなされていることも付記しておきたい⁽⁵⁵⁾。

更に特筆すべきなのは、アートレスが繰り返す、迷宮を歩くのには正しい方法も誤った方法も

ないと述べ、それを、迷宮について教える際の核としていること⁽⁵⁶⁾である。歩く速度はどの程度がよいのか、途中で人とぶつからないようにすべきか、立ち止まってもよいのか、どのような時に歩くべきかなど、様々な疑問が生ずるだろうが、「迷宮を歩く瞑想の際は、どのような振る舞いをなすべきかについて、規定や指示をされるべきではない」⁽⁵⁷⁾とアートレスは語る。そのため、3つのRなども、単なる指標に過ぎないということを強調し、迷宮を実際に活用する、実践する側の主体性に多くを委ねている傾向が見て取れる。

こうしたアートレスの見解は、今日のスピリチュアリティの本質と端的に呼応するものであろう。ラビリンス・ムーブメントでは、中世のシャルトル大聖堂の迷宮がひとつの宗教的な根源に置かれながらも、複製された迷宮の利用のしかたについては各々、迷宮の通路を歩む者が自由に選択していくことが可能であり、キリスト教的な要素をどこまで絡めて利用するかは実践を行う者の判断に任せられている状況にある。グレイス・カテドラルのウェブサイトに掲載されている迷宮利用のガイドラインが「あなたが自然だと思えるようにして(迷宮を使って)ください(Do what you feel natural)」⁽⁵⁸⁾という一文で締めくくられていることは、ある種、象徴的ではないだろうか。ただ、アートレス自身は、スピリチュアルという語は頻繁に使用するものの、学術的な用語としての「スピリチュアリティ」の多様な定義に関しては、あまり好んで使わない旨を述べており、学術的な諸定義は無味乾燥であるが、「わたしたちは、我々の生活と人生に、あまねく精霊(Spirit)が浸透するのに助けになるような、そうした方法や手引きを求めている。我々はよりよき人でありたいと願う」⁽⁵⁹⁾と述べているため、アートレス自身は、宗教学的な理解に基づくスピリチュアリティ概念の一事例として迷宮をみなすことには消極的である点に注意しなくてはならないだろう。

とはいえ、今日のラビリンス・ムーブメントにおける迷宮の活用を、スピリチュアリティの中に位置づけることは可能であると思われる。具体例として、2007年にグレイス・カテドラル内部に設置された舗床タイプのシャルトル・レプリカ⁽⁶⁰⁾の活用形態が参考になるだろう。この屋内の迷宮では日曜に聖体拝領が行われ、そして火曜にはヨガのワークショップ [fig.10]⁽⁶¹⁾が開催されており、迷宮の活用がかなりフレキシブルな形態でなされていることがわかる。

これに留まらず、種々の迷宮関連書籍の記述などを参照すると、迷宮を使うのに何ら正しい方法はないというアートレスの言葉通り、人それぞれに、さまざまに迷宮を活用していることがわかる。こうしたガイドブック類は、概ね迷宮図像史の概略に始まり、祈りや瞑想に迷宮を活用することの提案、迷宮の描き方、素材や使い方のアイディアの紹介などの内容を含んでおり、時としてエピグラフに松尾芭蕉やウパニシャッドなどの引用も見出される⁽⁶²⁾など、広範な地域の多様な文化、(宗教)伝統と関連づけ、読者の霊的なインスピレーションに働きかけるタイプの記述であるといえよう。

とはいえ、本節でも既に述べたように、キリスト教的な要素を重視する著者、宗教的バックグラウンドを持つ著者においては、クレタ型などの古代の迷宮よりも、シャルトル型が重要視される傾向にある。また、キリスト教的要素と迷宮とを強く結びつけるタイプの書籍⁽⁶³⁾も存在しており、このような潮流は、とくにクリスチャン・スピリチュアリティと呼ぶこともできるかもしれない。

しかしながら、キリスト教化よりも前の迷宮(クレタ型など)と、キリスト教に受容された後

の迷宮（シャルトル型など）が混在している今日のラビリンス・ムーブメント全体を称して、クリスチャン・スピリチュアリティと呼ぶことは、筆者には些か躊躇われる。しかしながら、単なるスピリチュアリティの一語で説明をしきれるとも言い難い。そのため、本稿においては、迷宮図像群が医療現場やカウンセリングなどにおいて、ホリスティックヒーリング、あるいはスピリチュアルケアのひとつとして活用されている⁽⁶⁴⁾ことも手がかりとした上で、ラビリンス・ムーブメントを称するために、補完的スピリチュアリティ (complementary spirituality) という表現が適当なのではないかという提案を暫定的ながらも行っておくことにしたい⁽⁶⁵⁾。

6. 迷宮を歩くということ

迷宮というかたちの最大の特徴は、何よりも、その内部へと人が進入して通路を辿るということ、即ち人間の身体性と密接な関わりをもつことにあるだろう。本稿で確認してきた通り、古代の迷宮と舞踏との関連は頻繁に論じられている。加えて、中世には大規模な迷宮が教会につくられたことにより、迷宮は、人々がその通路を歩くという行為と不可分のものとして確立したといえる。そのため、現代におけるラビリンス・ムーブメントを論じる際にも、人間の身体の動きの問題を抜きにして語ることはできないだろう。そこで本節においては、ロジェ・カイヨワの「遊び」論を参考にし、現代のラビリンス・ムーブメントの分析を試みたい。

迷宮を歩くということは、カイヨワのいう遊びの概念⁽⁶⁶⁾に当てはまると考えられる。カイヨワは「遊びにおいては、競争、偶然、模倣（模擬）、目眩のいずれかの機能が優先的なものになっている。私はそれらをめいめい、アゴン、アレア、ミミクリ、イリンクス (Ilinx) と呼ぶ。(中略) 速度のある回転運動や落下運動などによって、混乱と動揺を自身の身体器官に生じさせるのがイリンクスである」⁽⁶⁷⁾と述べており、イリンクスはギリシャ語の渦巻に由来している。ここで、迷宮という図像の形状を何らかの渦的なものとしてみなすならば、迷宮を歩くということとイリンクスを結びつけることが可能であると思われる。

カイヨワによると、イリンクスの定義は「目眩の追求に基礎を置いた諸々の遊びであり、知覚の持っている安定性を一時的に解体しようという試みである。またこれらは、明晰な意識に、ある種の官能的なパニックを与えようとする」⁽⁶⁸⁾ものであるという。

筆者にはシャルトル大聖堂の迷宮を歩いた経験があるが、実際に迷宮の通路を歩いてみると、曲がり角で180°の方向転換を何度も行うことになる。その際には方向感覚や平衡感覚に違和感を覚え、軽い眩暈を感じたのだが、これは日常的に行う運動や安定性の範疇外にある、非日常の感覚であったといえる。迷宮を歩くという渦動がもたらすものは、単純な癒しや快さだけに留まらず、それらはカイヨワのいう官能的なパニックと表裏一体の性質をもつだろう。つまり、迷宮の内部に入って動くということは、身体的な動きに伴い、内的な意識の動きをも促し、何らかの意識変容が生じることであるといえる。

以上から、今日のラビリンス・ムーブメントにおける迷宮図像群の活用は、カイヨワのイリンクスに概ね適用できるのではないかと考えられる。ただし、カイヨワのイリンクスの定義においては、運動に一定の速度を求める記述があるが、迷宮の道を辿る際には必ずしも速さが必須とされるわけではないため、両者が完全に一致しているとは言い難い。そのため、迷宮を歩くという

ことは、言うなればイリンクスの亜種であり、近年にみられる迷宮の普及と流行は、イリンクスの現代的なかたちであると理解することが適当であると思われる。

なお、迷宮の図像史を紐解く上で、遊びというキーワードは既に存在感を持っていることを付け加えておきたい。シャルトルなど数少ない事例を除き、司教座聖堂や教会に中世期に設置された迷宮図像の多くが撤去されてしまっているが、その理由として有名なエピソードは以下の通りである。「アミアン、サンス、ランスなどの教会にあった迷宮の正確な図面が今日なお現存している。こういった迷宮のほとんどが18世紀には教会の長の命令によって破壊された。その理由は、これらの迷宮が子供たちのけんけん遊びに使われてしまうため、聖別された場所の神聖さについて当時新しく登場した観念と決して合致しないものと考えられたからであった。皮肉なことにこの新しい観念は、聖と俗とを厳密に啓蒙主義的な観点から峻別することにその基礎を置いているものなのである」⁽⁶⁹⁾。

7. 今日の迷宮普及現象を再考する

さて、これまで本稿で参照してきた迷宮（史）研究者たちの発言の多くが、近世から近代にかけて、迷宮は徐々に失われ、忘れられていったという論調であったのだが、ここ二十年ほどの間に迷宮が急激な普及を遂げた現象を鑑みるならば、確かに、迷宮が現代において「復活」した、あるいは「リヴァイヴァル」を果たした、「再発見」された、とみなすことも可能であるように思われよう。

セイワドは、迷宮象徴の歴史は終焉したのではなく、宗教的、スピリチュアルな遺産としてなお保持されていたものが開花しなおしたとする⁽⁷⁰⁾。実際に、教会迷宮も復活を果たしており、シャルトルのコピーとしてではない新しい迷宮 [fig.11] が、1977年にドイツのケルン大聖堂クリプトに据えられていることは、スピリチュアリティではなくキリスト教的な文脈における迷宮の「リヴァイヴァル」としても一定の評価が与えられるだろう。

ただ、こうした一連の「リヴァイヴァル」という表現に対しては慎重にならねばならない。はたしてその主体や主語は迷宮でよいのだろうか。だとしたら、迷宮図像そのものが、あるいはその象徴性や聖性といったものがリヴァイヴァルしているのだろうか。そもそも、今日の迷宮流行現象に対して、リヴァイヴァルという表現を用いるのは適切なことなのだろうか。

おそらく、迷宮という図像が単体でリヴァイヴァルを果たしたのではない。何故ならば、迷宮はそれ自身でひとつの図像として存在しているともいえようが、迷宮が真に完成するのは、その通路に人間を迎え入れることによってなのである。そのため、今日の迷宮普及自体は目を見張るべき現象であることに変わりないが、それを、近代において迷路に駆逐されて世俗化し忘れ去られた迷宮の聖性の復活、という端的な認識だけで片付けることは適当ではないだろう。

第一に、迷宮はいかなる意味と関連し得るのか、というケルンの問いは、現代に至っても解決されていないことに注意すべきである。おそらくこの問いへの答えは最初から失われているため、人々は過去に生まれた諸説を参照し、思い思いに迷宮への思いを馳せねばならない。アートレスは、迷宮を歩くということに正解も間違いもないというが、それは迷宮にいかなる意味を読み込むかという問題にもそのまま当てはまるものである。このような状況下で、迷宮そのものの象徴

性や意味といったものは、現代においてもなお、以前と同様の浮遊を続けており、新しく強力な迷宮解釈が生まれ、それが人々を席卷しているという現象は確認できない。そのため、今日の状態を敢えて評するならば、いかなる意味かはっきりしないという迷宮の「迷」性そのものに聖性が備わってきていると考えられる。中心、規範、価値観などが揺らぎ、失われ、確固としたものに依ることができない現代において、迷宮の「迷」性の聖性はきわめて特徴的なものであり、当代を象徴するかたちであるといえる。迷宮の意味が、その通路を往く人々によってその都度与えられるのだとしたら、ある意味、迷宮自体に意味や象徴性は存在しないということも可能ではないだろうか。人が迷宮の中に（身体的に）入る。すると、それぞれの人の中に（精神的に）迷宮が刻印される。ひとつの渦的な流れ、あるいは循環関係が人間と迷宮のあいだに見受けられる。そして、迷宮の聖性が復活したのではなく、迷宮になにがしかの意味を持たせる人が増えている状況であるとするならば、迷宮というかたちそのものの聖性のみに焦点をあてて論じるべきではないだろう。

こうした迷宮と人間との関係に着目しつつ、以下ではさらに、人によって作られる現代の迷宮の聖性という観点から、複製と聖性にまつわるひとつの事例として、シャルトル・レプリカを検討したい。

20世紀以降の人間が実際に歩ける迷宮図像群においては、石、植物（芝のみならず鉢植えやラヴェンダーなどのヴァリエーションも存在する）、舗装そして屋内、屋外、教会内、公園内と、本稿の迷宮図像史で確認してきたあらゆる要素が同時に混在しているのが特徴である。それ以上に、20世紀という時代は、石や植物といった従来の素材に加え、迷宮を造るための新たな素材が出現する時代であった。ラビリンス・ムーブメントにおいては、コンクリート製の迷宮が各地に設置されていることが現代的であるが、何よりも、カーペットやキャンパスなどを用いた迷宮が誕生したことは画期的である。これは、（原寸大に）迷宮を複製して印刷を行うという今日の技術の賜物であるのみならず、人間が通路を歩くことのできるタイプの大型の迷宮がはじめて運搬可能になったことを意味している⁽⁷¹⁾。

この事態は、特定の場所に固定されないという意味においては、ある種の中心の喪失でもあろうが、人間ではなく、迷宮図像そのものが巡礼・旅をはじめたとも考えられよう。加えて、シャルトル・レプリカが大量に生み出されることによって、シャルトルは再聖地化を果たしたことも指摘できる。シャルトルは9世紀に寄進された聖遺物（聖母マリアの衣とされる）により、聖母崇敬の中心的聖地であったが、今日では、シャルトル型の迷宮が複製されればされるほど、一連のレプリカ図像群のオリジナルであるという性質が強まり、迷宮の聖地としての新たな認識が創出されているといえる。

一年の多くを迷宮が礼拝者用の椅子に覆われている「期間限定」性もあいまって、椅子が撤去される機会を逃さぬようにと、今日では世界中からシャルトルに巡礼者が訪れているのであるが、それは、本来サンティアゴ巡礼の中継地であったシャルトルの、聖遺物を納める大聖堂の一部にすぎない迷宮が、新たに現代的な聖性を帯びた現象と解釈され得るのではないだろうか。20世紀の美術における複製芸術が、オリジナルを持たない大量生産に基づくのと異なり、シャルトルのレプリカは、そのオリジナルが今なお失われていないために、その起源としての力、宗教性は、今後も複製されるほどに強まっていくことになると予想されるだろう。

8. おわりに ―迷宮と日本―

本稿の冒頭で、迷宮と迷路という語が厳密に区別されていない現状について述べたが、迷宮図像そのものも、本邦においては殆ど認識されておらず、僅かに数件の迷宮が存在する⁽⁷²⁾ほか、シルク・ド・ソレイユの「コルテオ」⁽⁷³⁾公演の舞台にシャルトル・レプリカが描かれていた事例なども挙げられるが、目立った迷宮の普及やムーブメントは現時点では確認することができない。そのため、未だ日本における迷宮を論じる段階にはないが、日本と関連した迷宮利用の事例を最後に挙げておく。

ヴェリディタスでは、グローバル・ヒーリング・レスポンス（GHR：Global Healing Response）と称し、大規模な自然災害に対して、迷宮を使用した祈りによって応える試みを提案している⁽⁷⁴⁾。その一環として、2011年3月11日に発生した東日本大震災を受けて、アメリカの各地やバハマなどで、3月から4月にかけて、追悼と慰霊を趣旨とした催事が開催されていたことを記しておきたい〔fig.12〕⁽⁷⁵⁾。このような形の迷宮利用は、迷宮を歩いた人間が歩くことによって癒しを求めるのではなく、歩くことによって、人々の抱える痛みに遠くから寄り添おうとする意思の表明であると考えられ、スピリチュアルケアのひとつの形態としてみなすことができるだろう。

以上、本稿では、迷宮という図像の歴史を確認したうえで、主としてアメリカにおける現代の迷宮普及現象について、スピリチュアリティ、身体性、聖性などの問題と絡めつつ検討し、紹介を行ってきた。その際、現代における迷宮解釈や、新たな意味、象徴性の創出に関する詳細な議論は本稿では控えたが、今後、長期的に調査を行うことで、迷宮普及の推移を観察するとともに、人々の迷宮活用や解釈の分析、類型化などを試みるのが重要になることが予想される。しかしながら、その際に注意すべきなのは、迷宮の聖性や象徴性が「リヴァイヴァル」したという語りと併せて、迷宮の「再発見」を行った側の人間について、そしてその時代背景について考察することではないだろうか。

本稿の冒頭で、迷宮においては誰が、そして何が「迷」うのだろうかと言った。迷宮を現代におけるイリンクスと規定するならば、迷路がその内部で人を迷わせるように、迷宮もまた、内部に入る者に眩暈を覚えさせ、迷わせると考えることも可能であろう。

しかし、むしろ現代における迷宮の本質は、内部で人間を迷わせることよりも、迷いを抱えている人々を受け入れることにあるのかもしれない。だとすれば、今後の宗教学的な迷宮研究においては、図像の象徴性の問題だけにとどまらず、そうしたケアの視点も活用していくことが求められることになるだろう。

「迷宮 (Labyrinth)」図像群に関する一考察
 —迷宮史概略、および現代アメリカにおける迷宮図像活用について—

fig.1 シャルトル型迷宮



シャルトル大聖堂身廊床に描かれた迷宮



fig.2 クレタ型迷宮

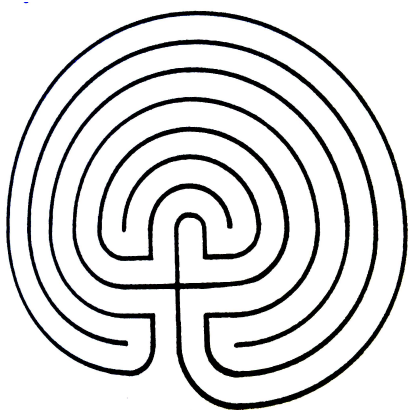


fig.3 クレタ型迷宮の描き方

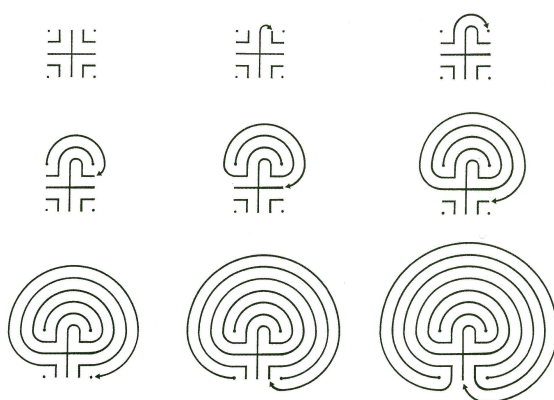


fig.4 クレタ型迷宮のアレンジ例

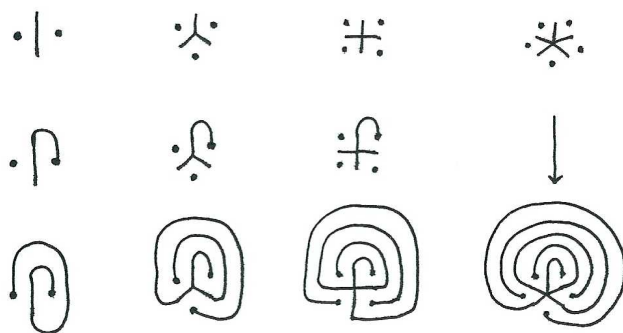


fig.5 ローマ時代のモザイク迷路（3世紀）

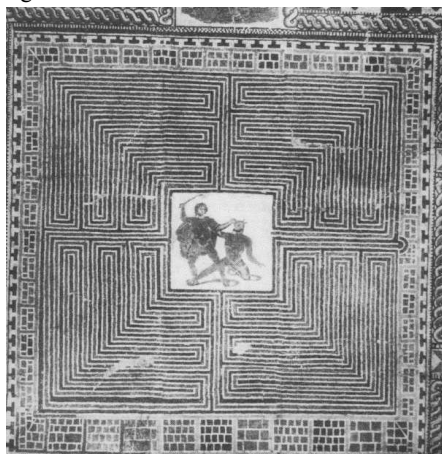


fig.6 エル・アスナムの迷路

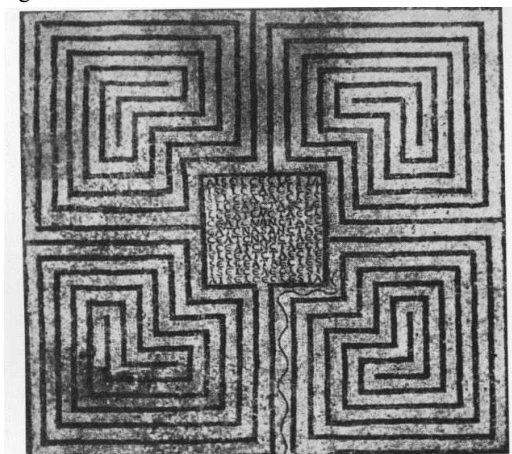


fig.7 fig.6の中心部の拡大

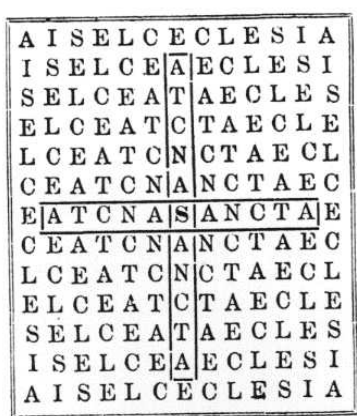


fig.8 シカゴ、庭につくられた迷路

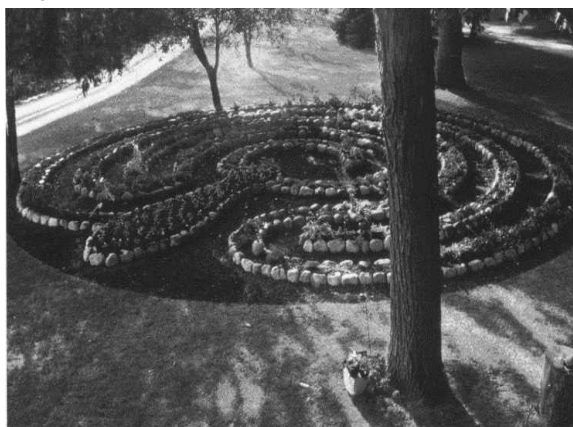


fig.9 グレイス・カテドラルのシャルトル・レプリカ



fig.10 グレイス・カテドラルでのヨガ・プログラム



fig.11 ケルン大聖堂の迷宮

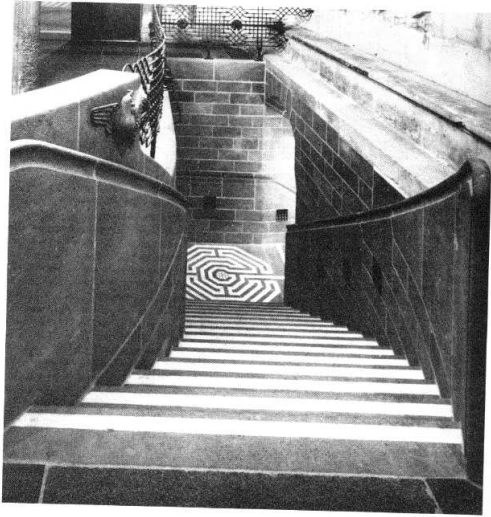


fig.12 パハマでのGHR



図版出典

[fig.1, 5, 6, 7, 11] Hermann Kern, *Through the Labyrinth*, Prestel, 2000

[fig.1 (大聖堂内部)] Bailey Cunningham, *Mandala voyage vers le centre*, Le courrier du livre, 2002

[fig.2] Sig Lonegren, *Labyrinths ancient myths and modern uses*, Gothic image pub. 2007

[fig.3, 8, 9] Jeff Saward, *Magical paths Labyrinths & Mazes in the 21st century*, Mitchell Beazley, 2002

[fig.4] 筆者による。

[fig.10] <http://www.gracecathedral.org/cathedral-life/communities/yoga/>

<http://labyrinthyoga.com/>

[fig.12] <http://www.thebahamasweekly.com/>

註

- (1) これは必ずしも日本に限らない現象であり、labyrinthとmazeがしばしば混同されることについては、以下などで言及されている。
Cf. Jeff Saward, *Magical paths Labyrinths & Mazes in the 21st century*, Mitchell Beazley, 2002, p.7
- (2) この呼称は、1998年5月のニューヨークタイムズによる。
Cf. Lauren Artress, *Walking a Sacred Path Rediscovering the Labyrinth as a Spiritual Practice*, Riverhead Books, 2006, preface (左記は改訂版のもの。初版発行は1995年)
なお、セイワドなどはこうした現代における迷宮普及現象を、迷宮の「リヴァイヴァル」「ルネサンス」といった表現で表している。アートレスは「再発見rediscovery」と称することもある。
- (3) Cf. Hermann Kern, *Through the Labyrinth*, Prestel, 2000, p.73
矩形のクレタ型である。また、和泉雅人『迷宮学入門』講談社、2000年、27-28頁も参照。
- (4) ヘルムート・ヤスコルスキー 城眞一訳『迷宮の神話学』青土社 1998年、26-28頁。なお、第Ⅱ型はいわゆる迷路であり、最古の図像は15世紀ヴェニスにみられる。第Ⅲ型は根茎迷宮 rhizome-labyrinthであり、ドゥルーズとガタリに依拠してウンベルト・エーコが定式化したものである。
- (5) 分布図などについてはKern, Ibid.を参照。
- (6) Kern, Ibid., pp.30-38
- (7) Ibid.
- (8) 和泉, 前掲書, おわりに, 217頁。
- (9) 指で通路を辿るタイプの迷宮は、カウンセリングなどで使用され、フィンガー・ラビリンスと呼ばれている。
- (10) 「ミーノースはある神託に従って彼〔ミーノータウロス〕を迷宮(ラビュリントス)中に閉じ込めて見張っていた。迷宮はダイダロスが造ったものであるが、「もつれにもつれし紆余曲折に出口を迷わす」一室であった。(中略) ミーノースの娘アリアドネーは彼〔テーセウス〕に恋心を抱き、もし彼女をアテーナイに連れて行って妻としてくれるなら、援助しようとして申し出た。テーセウスは誓いをしてこれに同意したので、彼女はダイダロスに迷宮の出口を教えるよう頼んだ。彼の教えに従ってテーセウスが入るときに糸玉を与えた。テーセウスはこれを扉に結びつけて、引きつつ内に入った。ミーノータウロスを迷宮の一番端の部分に見出し、これを拳で打って殺し、糸玉を引きつつ再び外に出た」
高津春繁訳 アポロドーロス『ギリシア神話』岩波書店、1978年、169, 174頁。
- (11) 1999年BBC制作の番組「迷宮」においては、エヴァンズ説が紹介されていた(「BBC地球伝説」として日本でも放映)。そのほか近年出版されたラビリンス・ムーブメントの関連書籍などにおいては、エヴァンズ説に基づく記述も多くみられる。
- (12) ヘロドトス『歴史』, ディオドロス『歴史叢書』, プリニウス『博物誌』など。
- (13) 和泉, 前掲書, 第3章。
- (14) ヤスコルスキー, 前掲書, 235頁。
- (15) Gernot Candolini, Traduit par Anne Charrière, *Mandala Labyrinth*, Le courrier du Livre, 2002, p.22

には「螺旋は迷宮の最も単純な形態」との記述がある。クレタ型迷宮の描き方 [fig.3] を単純化していくと、シンプルな渦巻が現れる [fig.4] ことは、その裏付けとなるだろう。このため、筆者は迷宮を「渦的なかたち」の範疇に入れて論じることが可能であると考え。

- (16) 『ギリシア神話』175頁。
- (17) カール・ケレーニィ 種村季弘・藤川芳朗訳『迷宮と神話』弘文堂, 1996年, 70頁。
- (18) イヴ・ボンヌフォア編『世界神話大辞典』大修館書店, 2001年, 269頁。
- (19) Cf. Kern, Ibid., pp.46-50
また、バスク地方に伝わる「かたつむりのダンス」との関連もKernをはじめ、頻繁に指摘される。
- (20) ケレーニィ, 前掲書, 55頁。
- (21) ヤン・ピーパー 和泉雅人監訳『迷宮 - 迷宮的なものの解説。都市・巡礼・祝祭・洞窟』工作舎, 1996年, 28-29頁。
- (22) 鈴木聡訳 ヘルマン・ケルン「世界と聖域の模像」『現代思想』vol.11-7 青土社, 1983年も参照。
- (23) Saward, Ibid., pp.21-22
- (24) Ibid.
- (25) なお、都市創建儀礼について、また、ケレーニィのいう舞踏化された迷宮とも関連して少々言及の必要性を要するのが「トロイア遊戯Lusus Troiae」である。トロイア遊戯はローマ時代に行われた通過儀礼、死者崇拜儀礼、都市創建儀礼であり、主にふたつの騎馬隊によって迷宮図像状の運動が行われるという特徴を持っている。詳細はKern, Ibid., pp.77-83
- (26) Cf. Saward, Ibid., pp.21-22
- (27) 「戦う者たちはみなこの町をまわり、この町を一周しなければならない。六日の間、そのようにしなければならない。七人の祭司が七つの雄羊の角のラッパを持って箱の前を行き、七日目には君たちは七回町を回り、祭司たちはラッパを吹かなければならない。雄羊の角笛が長く吹き鳴らされて、君たちがラッパの音を聞いた時は、すべての民は大声でときをあげなければならない。そうすれば町の城壁は崩れ落ちる」関根正雄訳『新訳旧約聖書 第2巻 歴史書』教文館, 1994年, 425頁 (エリコの陥落)。
- (28) 和泉, 前掲書, 126頁。
- (29) 「10よりひとつ多い11は過剰を表す数字である。十戒の充溢と完全性にもうひとつのものを加えることは罪であり、立法を踏み外すことである。11は、10あるいは12によって表される調和と論理を乱す個人的逸脱である」ミシェル・フイエ 武藤剛史訳『キリスト教シンボル事典』白水社, 2006年, onze (11) 項。
- (30) Cf. Saward, Ibid., p.22
- (31) 16世紀後半のものとされる設計図のみ残存している、フランスのランス大聖堂の迷宮図などが代表例。それによると、司教や建築家の姿などが確認でき、ダイダロスとの類似点がつねづね指摘されている。また、ランスの迷宮は「エルサレムへの道」と称された。迷宮がおかれた大聖堂などはしばしば巡礼の旅路にあったほか、迷宮そのものが(霊的な)巡礼路ともみなされたとされる。アミアンに現存している迷宮も「エルサレムへの道」と呼ば

れている。以上についてはヤスコルスキー、前掲書、6章などが参考になる。

- (32) Kern, Ibid., p.146
- (33) 和泉, 前掲書, 133頁。
- (34) ケレーニイ, 前掲書, 45頁。
- (35) ヤスコルスキー, 前掲書, 96頁。
- (36) 狩猟や漁業のための魔術的儀礼、豊穡を祈念するための舞踏などとの関連が指摘されているものの、定まった解釈もその有力な根拠となるものも存在していない。和泉, 前掲書, 104～113頁, Saward, Ibid., pp.28-29などが参考になる。
- (37) Saward, Ibid., p.29
- (38) 和泉, 前掲書, 140頁。
- (39) ピーパー, 前掲書, 351頁。
- (40) 前掲書, 357頁。
- (41) 一方で、15世紀～17世紀の人文主義、マニエリスム芸術においては、壁を備えた三次元状に描かれた迷宮図が初出するほか、文字を迷宮状に並べた（霊的）文字迷宮とよばれるグループが生じるなど、近世から近代にかけては、迷宮が一方的に迷路に主導権を奪われていたとも言いきれない状況であった。18世紀のノイデルファー、ヒルテンスペルガーやヴァーグナーらの手による一連の（霊的）文字迷宮については、宗教的な題材が多く含まれているため、宗教学的にも更なる考察が求められよう。
- (42) ここで想定されているのはすごろくや言葉遊び、そして玩具などである。
和泉, 前掲書, 173頁。
- (43) 前掲書, 218頁。
- (44) 以降、本節の記述はSawad, Ibid., The Returning to symbolismとThe spiritual revival章による。
- (45) エアトンは1956年に神秘体験を得たことをきっかけとして迷宮象徴に注目している。彼の他の作品には、ミノタウロスや飛翔するイカロスなどをモチーフにしたものも確認できる。
Cf. Saward, Ibid., p.80
- (46) ヤスコルスキー, 前掲書, 18頁。
- (47) Artress, Ibid., p.20
- (48) 世界各地の迷宮が登録されており、さまざまな条件で検索を行えるウェブサイトWorldwide Labyrinth Locator（運営にはアートレス、セイワドらが関わっている）によると、本稿執筆時の総登録件数は約3900件、うちアメリカのみで約3000件であり、その約半数を「中世型」すなわちシャルトル型が占める。なお、アメリカにおける迷宮の設置場所の内訳は、「教会・礼拝所」約1300件、「公園・公共の場」約300件、「病院・ホスピス・ヘルスケア」約120件等の結果となる。
参考URL : <http://labyrinthlocator.com/>
- (49) Greening Power, Greening the human soulを意味する。なお、アートレスはこのveriditasという語を、ヒルデガルド・フォン・ビンゲンから引用しているとのこと。
Cf. Artress, Ibid., p.xi
参考URL : <http://www.veriditas.org/about/FAQs.shtml>

- (50) 1990年代後半以降、迷宮図像群に関連する種々の書籍の出版が相次ぎ、迷宮図像を使用したスピリチュアルな実践のためのガイドブックが多くみられる。数ある迷宮のなかでも、クレタ型あるいはシャルトル型がとくに表紙で選ばれる傾向にある。
- (51) Lauren Artress, *The Sacred Path Companion*, Riverhead Books, 2006, p.x
- (52) 参考URL : <http://www.veriditas.org/about/FAQs.shtml>
- (53) 参考URL : <https://www.veriditas.org/programs/chartres-home.shtml>
また「シャルトル大聖堂の迷宮を歩く」ことに特化したガイドブックも発行されている。例えば、アートレスに教えを受けたジル・ジオフリオン（Jill Kimberly Hartwell Geoffrion）の書籍は、準備、現地での実践から帰宅するまでを霊的に丹念にフォローし、短い疑問形の散文を多く配置して読者に思考を促し、多くの答えを書き込ませる欄を設けることで、自己との内的対話を促している。
Cf. Jill Kimberly Hartwell Geoffrion, *Praying the Chartres Labyrinth A Pilgrim's Guidebook*, The Pilgrim Press, 2004
- (54) Artress, *The Sacred Path Companion*, p.39
- (55) 各項目の説明の概要は以下の通り。
purgation (releasing) 「物思いや些事を取り除くための行い。心を開き、精神を静める時」
illumination (receiving) 「迷宮の中心に辿り着いたら、好きなだけそこに留まってよい。そこは祈りと瞑想の場所である。そして、あなたのためにそこにあるものを受け取りなさい」
union (returning) 「元来た道に戻ると、あなたは3つめの段階に到達する。それは、神、あるいは、あなたのハイヤー・パワー、あるいは、世界で作用している癒しの力と結びつく段階なのである」
参考URL : <http://www.gracecathedral.org/visit/labyrinth/>
- (56) Artress, *The Sacred Path Companion*, p.41
- (57) Ibid.
- (58) 参考URL : <http://www.gracecathedral.org/visit/labyrinth/>
- (59) Artress, Ibid., p.11
- (60) これは、1994年に作られた常設のカーペットに代わるもの。1995年には聖堂の庭にも迷宮が敷設され、昼夜を問わず人々が利用できるようになっている。2007年の聖堂床の改修により、グレイス・カテドラルはシャルトルさながらの様相に変容したといえる。
- (61) 参考URL : <http://www.gracecathedral.org/cathedral-life/communities/yoga/>
<http://labyrinthinyoga.com/>
- (62) Cf. Helen Raphael Sands, *The Healing Labyrinth Finding your path to inner peace*, Gaia Books, 2001
- (63) 聖書など、キリスト教的テキストの引用が顕著な例。Godという語も頻出することも特徴である。
Cf. Geoffrion, Ibid.
Geoffrion, *Labyrinth and the Song of Songs*, The Pilgrim Press, 2003
- (64) Cf. Seward, Ibid., pp.112-116
ヴェリディタスとグレイス・カテドラルが発行しているDVD, *Rediscovering the Labyrinth a*

walking meditation (2001) も参照。

- (65) 相補 (補完) 代替医療 (CAM : Complementary and alternative medicine) を参考としたほか、ブライアン・ドレーパーの表現alternative worshipも参考とした。

Cf. Brian Draper, *Labyrinth illuminating the inner path*, Lion Hudson, 2010

- (66) Roger Caillois, *Lex jeux et les hommes, le masque et le vertige*, Gallimard, 1961, pp.42-43 以下、引用する各項目末尾の () 内は筆者による補足。

1 自由な活動：遊ぶ人々が強制されてはならない。さもなければ直ちに、人を引きつける楽しい気晴らしという遊びの性質は失われてしまうだろう。(迷宮を歩くか否かは誰にも強制されることがない)

2 切り離された活動：あらかじめはっきりと定められた時間および空間という制限のなかでの範疇である。(迷宮という図像はあらかじめ定められた空間的制限といえる。また、迷宮を歩くということは、歩く時間という制限があるということ)

3 確かではない (はっきりしない) 活動：遊びは、その展開や推移が決められていたり、結果がすでに準備されていてはならない。ある種の行動の自由が遊ぶ者の自発性に残されていることが必須であり、それは発明の必然性によるからである。(迷宮を歩くことによって何を見出すのかは、歩いた人によってそれぞれ異なり、結果は予め決められていない)

4 非生産的な活動：富も利益も、あらゆる種類の新たな要素を生み出すことはない。そして、遊ぶ者たちのグループ間における所有権の移動を除き、遊びが開始された状況と同じ状況に帰結する。(迷宮を歩くことによって富や利益を直接得られるものではない)

5 規則正しく統制された活動：約束事や取り決めに従うこと。日常生活における法はこれによっていったん効力を失い、一時的に新しい法のみが有効となる。(通路をたどって中心部まで赴かねばならない。迷宮内での約束事として、通路の壁をまたいではない)

6 架空の (虚構の) 活動：日常生活と比べたときに、それははっきりとした非現実であり、あるいは二次的な現実であるという特殊な意識を伴うことになる (迷宮は日常生活とイコールになるものではない)

- (67) Ibid., p.47

- (68) Ibid., p.67

- (69) ピーパー, 前掲書, 344頁。

- (70) Saward, Ibid., p.151

- (71) portable labryrinthあるいはtemporary labyrinthという形態を生み出した。これに対し、動かせないものはpermanent labyrinthと区別して呼ばれることもある。

- (72) 参考URL : <http://labyrinthlocator.com/>

- (73) 2005年公演開始。なお、日本公演は2009年～2010年に行われた。

- (74) 参考URL : <http://veriditas.org/newsletters/globalhealingintro.shtml>

- (75) 参考URL : <http://labyrinthpilgrim.com> <http://www.thebahamasweekly.com/> など

Labyrinth Images: A Brief History of Labyrinth and the Labyrinth Movement in the Modern United States

Wakako NAKAJIMA

“Labyrinth” and “Maze” are two confusing terms or concepts. However, these two are quite distinct from each other. Though a maze has choices along the way, a labyrinth inevitably ends at the center and does not require the walker to make any choices.

The origin of the Cretan-Type labyrinth dates back to 1200 BCE. since that time, they spread along the coastal areas of the Mediterranean Sea and are seen in ancient Greek myths such as the tales of Theseus. In the Middle Ages, labyrinths were gradually incorporated into Christian churches and often appeared in manuscript. In the 13th century, a new type of labyrinth, the Chartres-Type appeared. However, with the spread of mazes, the labyrinth became almost forgotten until modern times.

Over the last two decades, in the United States, many sorts of labyrinths, especially the Chartres-Type, have been reproduced in churches, parks, hospitals, etc. People walk through it, following the path of the labyrinth physically, as a spiritual tool for meditation, healing or prayer. This phenomenon of revival in a multicultural-spiritual context is called the Labyrinth Movement.

This article introduces the Labyrinth Movement in the US, considering spirituality and the sacred, referring to Lauren Artress, the central figure of the movement. It also explores the relationship between humans and a labyrinth.